

思考力・表現力の評価に重点を置いた選抜試験 ～九州大学 21 世紀プログラムを例に～

林 篤裕 (九州大学 基幹教育院)

●1. はじめに

国家百年の計と言われるようにいつの時代も教育問題は多くの人々にとって大きな関心事である。我が国においても過去からいろいろな議論がなされ修正を加えながら現在に至っている。近年は、高大接続に関する議論も盛んに行われており、平成 26 年 12 月には中央教育審議会から「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」と題する答申も提出された。この中では今後の高大接続に関するいくつかの提言が示されており、高校と大学の接続点においては「高等学校基礎学力テスト(仮称)」や「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の実施も盛り込まれている。また、評価方法についても 1 点刻みの得点ではなく多様な力を段階的に評価することや、思考力、判断力、表現力を総合的に判断することに主眼をおいた試験の開発、また「合教科・科目型」、「総合型」試験の提言等が行われている。

筆者はこの提言を検討する場の一つとなっていた中央教育審議会 高大接続特別部会(第 7 回, 平成 25 年 5 月 24 日開催)において「九州大学 21 世紀プログラムの紹介 ～選抜方法を中心に～」と題して九州大学の取り組みを紹介する機会を与えられた。本プログラムは学部横断型という多くの大学教育とは異なった教育形態を採っているが、その入学者の選抜に置いては設立当初から 15 年間継続して思考力や表現力等を評価することに重点を置いた選抜試験を実施してきた。

今回の答申に我々の経験がどの程度参考にさせていただいたかはには判断できないが、従来から広く採用されてきた筆記試験とは異なる選抜試験の一例として本稿でもその一端を紹介させていただくことにした。

●2. 21 世紀プログラム

明治 44 年(1911 年)に 4 番目の帝国大学として医学部と工学部からスタートした九州大学には、現在文系 4 学部、理系 7 学部の合計 11 の学部があり、入学定員は 2,555 名である。多くは一般入試(前期日程、後期日程)で選抜を行っているが、国立大学として最初に AO 入試を導入した本学(他には東北大学と筑波大学が同年度に導入)は現在 7 つの学部(教育、法、理、医、歯、芸術工、農)と 21 世紀プログラムにおいて AO 入試を実施しており延べで 195 名(定員に占める割合は 7.6%, 平成 27 年度入試)の学生をこれで選抜している。

その名称が示す通り、2001 年から募集を開始した 21 世紀プログラム(以下 21cp と略

記)は「専門性の高いゼネラリスト」をキーコンセプトに「創造を引き出す知識と基礎的な知識」や「外に開かれた知識」の理念のもと「21世紀を担う人材育成」を目標に学部横断型教育を行っている。従来の大学教育が学部・学科単位の教育システムであったのに対して、21cpに所属する学生は自分の興味・関心に応じて11の学部の講義を各自で取捨選択して履修し、卒業要件とする。

また最終年度の1年間は自分が決定したテーマについて卒業研究を行い、卒論を提出することが求められており(図1)、その指導をしてもらう教員(約2,100名、平成26年度)を学内から自分で見つけてくる必要もある。

なお、専攻テーマの決定時期が一般的な大学生より3年ほど遅くなっているため、より専門性を高めることを目指して大学院への進学も推奨しており、現在のところ卒業生の4割程度の学生が九州大学のみならず国内外の大学院に進学している。

<図1. 学習形態の違い>=スライド1番

●3. 選抜方法

21cpの理念に基づいた人材を育成するために、我々は以下のような学生を求めている。

- ・自ら今日的な諸問題を発見し、これらを解決するための課題を設定し、その深い解明を目指して学習しようとする自主性があること。
- ・文系・理系にこだわることなく、広い分野の学習を進めながら関心の幅を広げ、総合的な探求の能力を高めることによって、自らの能力を最大限に発揮して行こうとする意欲があること。
- ・消極的な意味で自らの専門を決めることができないというのではなく、あれもこれも学びたいという積極性があること。
- ・学問を深く学ぶために、必要となる基礎的な能力を身につける努力をいとわずに、学習を進める主体性を持っていること。
- ・現代の政治や社会、歴史や文化、自然などに関する基本的な知識など、一定以上の教養を身に付けていること。特に、近代および現代の国内・国外の諸問題について関心があること。
- ・海外留学を実現させるための語学力を身につけようとする意欲があること。

※※可能なら上のような枠囲みをお願いできれば幸いです。

このような学生を選抜するために、大学入学後の学修課程を模した環境を疑似体験させてその振る舞いを評価する方法を導入している。外形的には2段階選抜方式のAO入

試であり、大学入試センター試験は課していない。

選抜のスケジュールとしては、図 2 に示す通りであり、9 月下旬に願書を受け付け、第 1 次選抜と第 2 次選抜を経て 11 月下旬には最終の合格発表を行う。やや早めとも言える時期に実施をしている理由は、21cp の選抜で不合格となった受験生に対しても年明け 1 月に実施される大学入試センター試験までに多少は時間が確保でき、その後のチャレンジに影響が少ないであろうと考えての措置である。また、合格者に対しては、入学までに時間があるため、電子メールも活用した事前学習課題を課している。

以下、それぞれの選抜について説明する。

<図 2. 選抜スケジュール>=スライド 2 番

●3.1 第 1 次選抜

出願時の提出書類は「調査書」、「志望理由書」、「活動歴報告書」の 3 点であり、これら書類の総合評価により選抜を行う。調査書は決められた書式に基づいて高等学校が作成する書類であり、出願に関して内申点等の制限はない。活動歴報告書は中学校在籍時以降の本人が行ってきた各種の活動やそれらの中からもっとも重点を置いた活動の説明、また表彰や資格の記録等を記してもらうものである(全体で 2 面)。そして、志望理由書には、21cp の理念を理解した上で、大学への進学動機や 21cp に入学を希望する抱負等を 2 面で書いてもらう。

我々はそれらの資料や記載内容を精査してアドミッション・ポリシー(AP)の理解度や志望理由の首尾一貫性、もしくは実現可能性等を評価する。また、本プログラムの学生は、特定の学部・学科に所属せず 21cp の学生として修学・卒業するため、特定の学部・学科を卒業することによって得られる資格(教育職員免許状や看護師国家試験受験資格等)は、本プログラムの修了によってでは取得できない。このことから、資格取得を希望している受験生は志望理由や能力が魅力的であったとしても、AP との観点から本来の学部・学科を受験してもらうべく 21cp では辞退願うことになる。

なお、第 2 次選抜の実施には、施設等の対応規模の制約から最大でも 80 名までしか受け入れることができないため、この範囲で第 1 次合格者を決定することになる。

●3.2 第 2 次選抜

<図 3. 第 2 次選抜の試験内容>=スライド 3 番

前項の合格者に対して、11 月初旬の土曜日・日曜日の 2 日間、延べで 13 時間に及ぶ第 2 次選抜を実施する(図 3)。1 日目は教員が講義を行い(約 50 分間)、続く約 70 分間でその教員が設定したレポート課題に取り組んでもらう。この講義とレポート課題のセット(合計 120 分)を 3 つのテーマ(人文科学、社会科学、自然科学)に対して実施し初日が

終わる。参考までに、平成 27 年度入試で行った講義題目は「古語は辺境に残る? --言語史研究の方法--」、「里地・里山の保全と農山村の持続性 --人口減少社会と集中豪雨災害--」、「身の回りの確率論 --確率を使って--」であった。

※※【文字数不足の場合】 参考までに近年 5 年間の講義題目を表 1 に示す。

※※ <表 1. 最近の講義題目>=スライド 5 番

2 日目午前は、前日の 3 つのテーマから 2 つを受験生それぞれが選択し、テーマごとに時間を区切って順に討論を行う(全体で 150 分)。この際、大人数では議論がスムーズに進行できないので、受験生を 15~6 名ごとの 5 教室に分けて実施するが、男女比、現浪比、出身地域等がなるべく均一になるように分割している。前日に教員が提供したテーマについて、自分の意見や提案を述べ、また同室の他の受験者の発言を受けて、自身としてどのように考えるか等を意見交換する。

なお、2 日目の朝には「論題」と称する討論の課題をテーマごとに提示する。これは、1 日目の講義内容について夜の間には書籍やインターネット、もしくは近隣の知恵者からいろいろな情報を収集して翌日に備え、午前の討論時間に自説を一方的に披露するだけに終わってしまい教室内での議論が咬み合わないような状況に陥ることを避けるための策である。

午後には、この 2 日間の経験を元に、前日の 3 つのテーマから 1 つを選び自身の主張に標題を設定して小論文を作成してもら(3 面, 270 分)。朝に提示した論題は小論文を書く際の課題ともなっており、これも討論の時と同様に事前に練ってきた構想を単に書き込むだけの時間とはさせないためである。小論文の作成と並行して予め通告した 15 分間程度の個人面接も順次行い、興味ある物事への関心の深さや広さ、また、志望動機や入学後の修学内容について質疑を行う。

なお、言語辞書や検定教科書等ある程度制限した範囲内で資料を持ち込むことが可能なコマもあり、試験開始前にはそれらの確認作業を行っている。

本論からはやや逸脱するが、この第 2 次選抜では、休み時間を経るごとに自分の興味分野や 21cp に何を求めているかといったことを受験生同士で相互に紹介し合って友達になっていく様が試験会場のあちこちで展開されており、その様子は入学試験というよりセミナーのようにさえ見える。また、無記名で任意提出してもらっているアンケート結果を見ても、2 日間を楽しんで自分自身がエンカレッジしたことや、受験生同士で深い議論ができて有意義であったといった感想、もしくは、試験の設営作業に礼を述べるコメントまでが散見され、運営側として恐縮もする。

●3.3 評価方法・実施体制

<図 4. 評価体制>=スライド 4 番

ここまでは受験生の立場から選抜の流れを追ってきたが、実施者側の体制についても説明する(図 4)。

第 1 次選抜では 3 点の出願資料に 4 名の教員が目を通して、それぞれについて評価を行う。また第 2 次選抜では、レポート課題と小論文の評価を A 委員(3 名 x3 テーマ)が担当し、討論と面接の評価を B 委員(3 名 x5 教室)が担当する。委員はそれぞれの評価を 4 段階で行うが、第 1 次選抜の活動歴報告書については 3 段階である。

第 1 次選抜に 4 名、第 2 次選抜の A 委員に 9 名、B 委員に 15 名、それ以外に統括、運営、試験監督や予備要員等のスタッフが必要であり、加えて事務職員の支援も欠かせないので延べで 40 名を超える教職員が関わって実施している。

それぞれの委員から提出された評価を集計し、決められたルールに基づいて順位付けを行う。評価に関わった委員が一堂に会した査定会議に順位表を提示して、AP との合致性や入学した場合の修学の耐性等を念頭に物事への関心の程度や文章の記述内容、発言状況等を担当委員から聴取しながら慎重かつ丁寧に審議して最終的な合格者を決定している。

なお、意外だと感じられるかもしれないが、第 1 次選抜の評価と第 2 次選抜のその関連はあまり高くはない。これは両方で異なる観点の評価を行っていると認識しており、このことから注意しなければいけないのは、第 1 次選抜の評価があまり高くない者でも、21cp にとって魅力的な受験生である可能性があることである。そのため、第 1 次選抜で安易に不合格にしてしまうと優秀な受験生を取りこぼして大きな損失となってしまう兼ねないので、この査定も慎重に行う必要がある。

●4. まとめ

入学後の 21cp の学生は、全 11 学部の講義の中から自分の興味・関心に基づいて独自のカリキュラムを編成し当該学部の講義を受講しに出向くが、その場には本来の学部・学科の学生がおり、その中に単独で飛び込んでいくことになる。

また彼らは、学内のイベントはもちろん、学外での地域との協働や各種 NGO・NPO 活動等にも積極的に参加している。21cp では留学も推奨しており、半分以上の学生が何らかの形で海外への渡航を経験しており(私費での渡航を含めるともっと多くなる)、例えば近年開始された「トビタテ! 留学 JAPAN」事業に関しても率先して応募し、選考が終了している 2 期分で、各 3 名ずつが採択されている。

入学者の 1%にも満たない数の学生でありながら、複数分野の勉学や広範な各種の活動に参画している姿は頼もしく、アクティブな学生が確保できていると実感できる。と同時に九州大学全体にとっても良い効果を生み出していると言える。つまり、21cp 学生の周囲にいる学生たちが、いろいろな活動を通して彼らに触発され、また触発して相互に切磋琢磨しながら両者で有意義な大学生活を醸成しているからである(「カナリア

効果」と呼んでいる)。

一方で、高校現場に対する学部横断型教育の理解には時間を要すると感じている。初期には6倍程度有った時期もあるが、ここ7年ほどは4倍前後の競争倍率で推移しており、毎年のように帰国子女からの志願もあるものの全体として九州地区を中心とした志願が多い。その意味で21cpの理念や選抜の観点、修学内容等の広報活動は重要であると認識しており、今後も志願者の増加に努めていきたい。

今回は選抜を中心に紹介してきたが、21cpに限らずAO入試の運営には一般選抜とは異なった注意が必要である。多種多様な準備には学内の人的ネットワークを駆使する必要があり、選抜する側にとっても時間と労力を要する。また、評価にも手間がかかることから多くの志願者を対象とすることが難しいため、第1次選抜である程度志願者を絞らざるを得ない。また、1点刻みの得点で提示できるものではないので、評価の中立性・公平性には常に注意を払い運営している。しかし、一連の作業を通して魅力的な学生が確保できている限り、これらの労を惜しむことは本末転倒であろう。

なお、紙面の関係でここには最低限の資料しか掲載できなかったが、高大接続特別部会で用いた資料や議事録は文部科学省のWebページに掲載されているので、必要に応じて参照されたい。URLが複雑と感じる場合は、会合の名称で検索をかけても当該ページがヒットすると思われる。

我々の経験が今後の高大接続の発展に多少なりとも参考になれば幸いである。

●参考文献

- 1) 中央教育審議会 高大接続特別部会 (第7回)、平成25年5月24日開催 発表資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/1335584.htm
- 2) 九州大学 平成27年度 21世紀プログラム学生募集要項
<http://www.kyushu-u.ac.jp/entrance/examination/>
- 3) 玉川孝道(2010), 杉岡洋一聞き書き 常識を超える 一医学者の軌跡, 西日本新聞社.

===== o =====

PROFILE (※長めに用意しました。分量を削減することもやぶさかではありません。)

はやし・あつひろ

九州大学 基幹教育院 教授。アドミッションセンターを兼務。1986年九州大学大学院 総合理工学研究科 修士課程修了。博士(工学)。川崎医科大学、岡山県立大学、大学入試センターを経て、2009年から現職。専門は計算機統計学、教育工学、高等教育論。